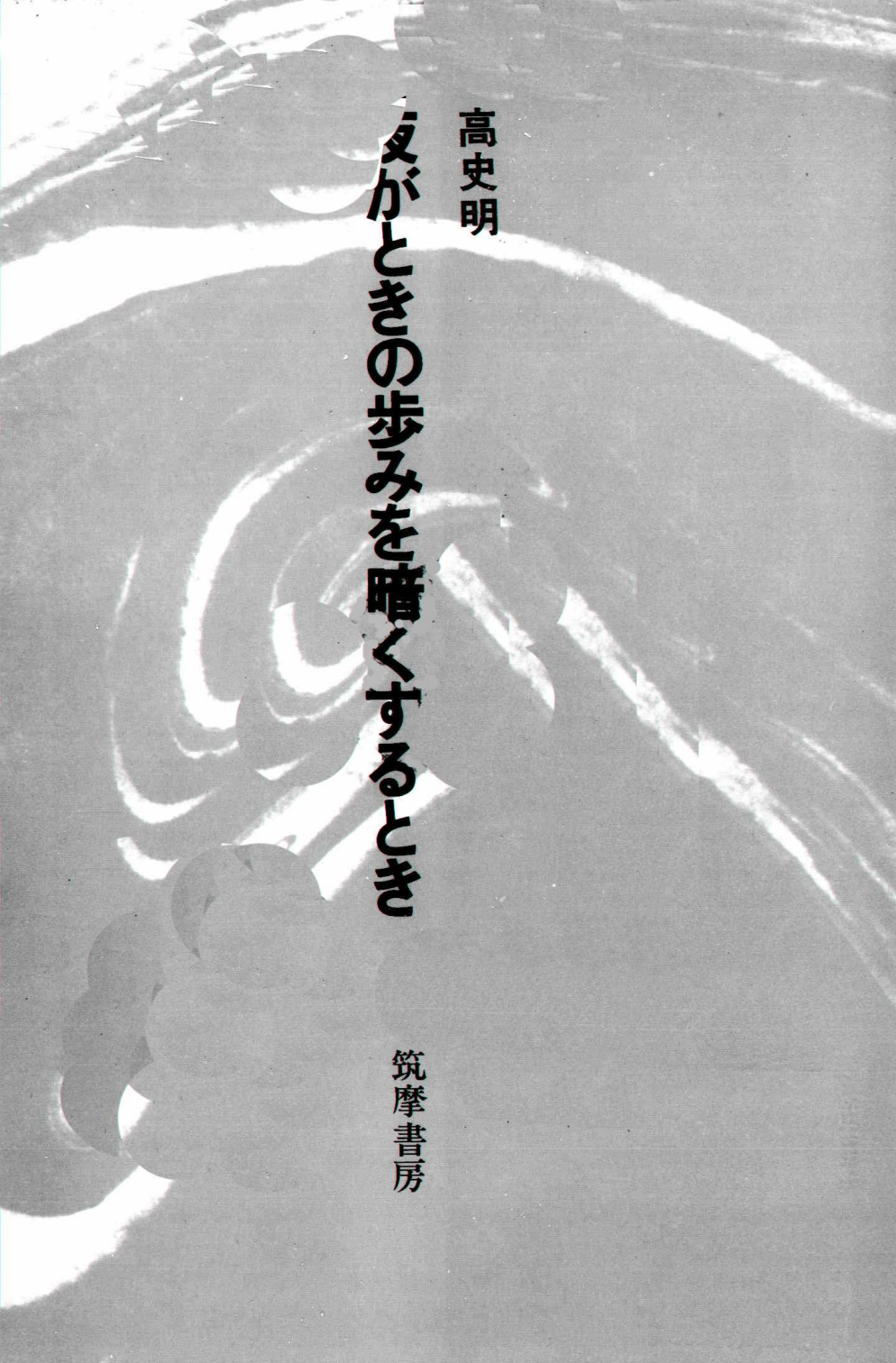
夜がときの歩みを暗くするとき

高史明

筑摩書房



夕がときの歩みを暗くするとき

高史明

筑摩書房

夜がときの歩みを
暗くするとき

昭和四十六年九月十五日初版第一刷発行
昭和四十六年十月二十日初版第二刷発行

定価　八五〇円

著者　高史明

発行者　竹之内静雄

発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話　東京（二九一）七六五一（代表）
振替　東京　四一二三
郵便番号　一〇一－九一

装幀者　吉田澄

印刷　暁印刷
製本　矢島製本

© 1971, S. Ko

（分類）0093（製品）80068（出版社）4604

夜がときの歩みを暗くするとき

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

境道夫はさっきから、鈍くひびく重い音を聞いていた。それはちょうど鉄丸の振子が厚いコンクリートの壁に激突しているように感じられる音だったが、それにしては妙に重く、まるで深い地底からとどいてくるように響く音であり、もしかしたら振子にあたるものは沈黙であって、沈黙の鉄丸が暗い頭蓋のうしろで揺れながら頭の骨を叩いているのかもしれなかった。いや、それとても確かにそうだとはいいきれない。ひょっとすると音のように感じられるものは音というようなものではなく、何ものかが彼の全身を圧えつけていて、その圧えつけてくるものの重みの下で骨が軋んでいるのかもしれなかった。そういえば彼のまわりを隙間なく埋めつくしているのは濃密な闇であり、それはおびただしい数の女や子供の屍の臭いを吸いこんだ黒い土のように重かった。彼はまるで生きたまま土葬されているかのように動けないのだ。……おれは埋められているのか。彼は闇を凝視した。どうやら彼は横たわっているのではなく、立っているのでもなく、俯せになり、胴体のところで体を湾屈させた恰好のまま、何ものかに圧えつけられているらしかった。もしかしたら、彼に音のように感じられるのは、やはり、そのえたいのしれないものの圧力によって生じる肉のうちの骨の軋りではないだろうか。彼は強引に動かない体を起そうとした。

と、ふいに、漆黒の闇が皺になり、嗄がれた声がして、彼の耳底を打った。こいつは生きてるぜ。そうだよ、生きてるよ。

彼は上瞼をぴくっと慄わせた。すぐ近くにだれかいる。彼はそれに気づくと同時に急に自分の状態を意識した。そうなのだ、彼はずうっと焼け爛れた屍体と屍体の間に、はさまれていたのであり、屍体は背中のうえにも折り重なり、動けなかったのはそのためであり、男たちはきっとその屍体を片付けにきたのであって、彼を圧し潰していた屍体を片付け、いま彼をも片付けようとして、頭と足とをもって持ちあげ、持ちあげたまま話しているのだ。

どうする？　さっきの声とは違う甲高い調子の声がいう。

これじゃあ、とても助かるめえ、ともう一人の方が答えた。

それだといって、生きてるんだからな、と相手の男はつづけた。

しかしのう、これじゃあ、よけいに苦しませるだけじゃないのか、助からんよ。

彼は目をひらき、ひらいた目に物が見えることに新しい

恐怖と驚きをおぼえながら、厚い粘膜をとおして見えるように感じられるものを凝視した。萎びた顔が見える。男の顔だ。それは、ぬるりとした感じの灰いろっぽい空を背景に浮んでいた。小さい顔のわりに痩せた大きい鼻と、かぶった戦闘帽の庇のもっとも深い影の中にある二つの鼠のような目が、こちらを向いている。そしていま、その男が、彼の目がひらいたことに気づいた。

目をひらいたぞ、みろよ、ほれ、こっちを見ているぞ、と男はいう。すると、相手の男がすぐそれに応じて口をひらいた。ほんとだ、こっちを見ている。こいつはきっと助かるよ、いままで生きていたんだからな。たとえ助からんとしても、このまま放っておくことはできんよ。おい、坊主、おじさんたちの声が聞えるか。もう、心配いらんぞ、いますぐ楽にしてやるからな。

彼は静かに下におろされ、長く水平になり、自分が地面に寝かされるのを感じた。たしかに彼の背中の下にあるのは、いままで彼の体が感じていた腐りかけの魚の感触とはちがう固い土であり、尻の肉の下にあるのは小石であって、それは肩の下にもあり、その尖った角が肩胛骨を突きあげているのがはっきりわかる。肩の骨が痛い。だが、その尖った角のある小石のもたらすものに彼は、そのとき深い感謝をおぼえた。おれは生きているのだ！

彼はしばらく自分の肉体の深いところに突き入ってくる鋭い痛みに身をまかせていたが、急に何ものかにせっつかれたみたいに喋ろうとして、脹れぼったい唇をうごかし、このときもまた、自分の唇がうごくことに一種の恐怖と驚きをおぼえながら、涸れた声を出した。

おじさん！　おれ、おれ、どうなってるんだ？　手なんか、あるのか、おれ。

すると、声だけが返ってきて、あの甲高い方の声がいうのが聞えた。何かいってるみたいだぞ。おい聞えたか、何かいったぞ。坊主、もうちょっとの辛抱だ。いま、おじさんたちが救護所に連れてってやるからな。

彼は、がらんとした空を見あげていた目を動かし、それから、すこしずつ頭をうごかし、男たちを見ようとし、がらんとした空がゆっくりと動き、やがて、その空の灰いろをくぎりとる黒い男たちの姿があらわれるのを見た。

辛抱せえ、もうちょっとだからな、と戦闘帽をかぶった男がいった。

見ると、向うに大八車があり、男たちはその大八車にとりついて、どうやら、男や女や子供の屍体を大八車から下している様子であった。彼はかすむ目をこらした。もっとはっきり見えてくる。彼らは共同して屍体を持ちあげ、ほとんどその躁が没してしまうほどの黒い粘液のような濃密

な腐臭のなかで、両足を踏んばって、持ちあげた屍体を投げ下しているのであった。鈍い湿った音がしている。彼は白い水のにじみ出してくる目を、積みかさねられている人肉の堆積に向けた。兵隊の屍体のうえに男の子がかさなり、手をだらりと垂れ、さらに女の子がかさなり、その上に女の屍体がかさなっており、そしてその女の横のもう一人の女の股のつけ根からは、蒼黒く変色し、南瓜のように脹れあがった子供の顔がのぞきでてい、その子供の、石のようになった目が、彼の方に向いていた。何があったんだア、彼は考える。虚空を睨んだ子供の目の穴を見つめる。と、そのときその暗い子供の目の奥の方から燃えあがる炎の大洪水が吹きだしてきた。

そうだった。朝、彼が市外の叔母の家にいるとき、彼方の市全体があっという間にどす黒い炎の巨大な塊となり、空中に吹きあげられたのであり、彼は父たちの所に戻ろうとして燃える町へ入り、黒い炎をくぐり抜け、おっとうと叫び、転び、そこでとつぜん恐怖につかまれ、炎と黒煙、逃げまどう人影と泣き声、喚き声に襲われ、方向を変えて逃げだし、逃げようと思い、人々が逃げる方へ、水のある方へと暴走する獣のようになった人々に、もまれながら逃げだしたのだ。それが、いまになって思い出せる。きっと、あのとき、彼が掻きわけようとして掻きわけることのできなかった人たち、彼を突きとばし、踏みつけ、わけのわからない怒声を発していた人たち、彼が突き転がした人たちが、この黒ずんだ人肉の堆積なのだ。水！　水！　という声がふいに咽喉を走った。みず！　彼は乾いた唇を動かす。みず、みず、みず……。彼はいまさらのようにつきあがる恐怖が、咽喉から頭へ、頭から背中の方へとうねり下るのを感じながら、さっきの男たちを探した。どうしても彼らに助けてもらわなければならない。おじさん！　と彼は声のない叫びをあげた。どうして、男たちの姿が見えないのだ。男たちは彼を残してどこかへいってしまったのか。いや、妙に光る灰いろの空をさえぎって暗い男の顔が近づいてきた。おじさん！　と彼はふたたびいう。が、間近にせまった顔を見つめて、彼ははっと息をのんだ。それは彼の探す男ではなく、意外にもかつて山村工作隊で一緒だった村上の顔だった。村上がどうしてここにいるのだ。ここは山なのか？　異様な息苦しさが彼を圧迫する。何かが彼のうちで回転した。そうだ、彼はいま山にいて、険しい谷間の道を見下す場所に立っているのだ。村上は崖道の岩陰からひょっこりあらわれ、いまそこを通りすぎたばかりの二人の男に追いつき、真中の男を前後からはさむようにして登ってくるのである。

何かあったんですか、後の小屋からでてきて、彼の横に

並んだ生田が緊張した声でいった。三人いますね、もう一人はだれです？

さあ、だれかな。

彼は答えたが、生田の方には目もくれず、淡い陽ざしが斜めに流れる崖道の三人に目をこらしつづけた。見張りに出したのは二人であり、真中にはさまれた男には見憶えがないのだ。間もなく男たちは死角に入ったが、彼はその場所を動こうとせず、彼らの姿をかくした灌木の茂みにじいっと目を据えていた。消えた男たちの方から放たれてくる不安が彼の目を突き刺す。同じ山にきていた工作隊の学生班二十一名が逮捕されたのは昨日のことであった。そしていまは彼ら自身がこの谷間まで追いつめられてきているのだ。やがて、落葉を荒あらしく踏みしだく足音がして、ふたたび茂みの中に男たちの姿が頭からたちあらわれた。

どうしたんだ？　彼は彼らがそばにくるのが待ちきれず上から声をかけた。

新聞記者というんですがね、と村上が答えた。

その男一人なのか？

ええ、一人です、こっちを探っていやがったんで。

彼は獲物に狙いをつける猛禽類の目つきになり、目の前に来た男の恐怖に縮んだ目を見つめる。記者が何をしにきたのだ。また、でたらめ記事を書くためにきたのか。彼は新聞記者に対して腹を立てていた。特にあのレッド・パージ以来、警察の尻馬にのって、公平を建前としてうたっていた新聞までが、彼らを細菌か毛虫のように取扱うようになってしまった、と彼は思っているのだ。記者なら、警察のかわりに斥候の任務を引受けているかもしれないな。どうしよう？　と彼は思う。彼はしばらく無言のまま、地下足袋をはき、登山帽をかぶってはいるが、背広をきて、ネクタイまで締めている男をじいっと見つめていたが、やがて自信のない口調で、そして自分の自信のない口調に不機嫌になりながら、陰気な声で質問した。

あんたは本物の記者なのか？　いや、記者は記者でも、ここへは警察に頼まれてきたんじゃあないのか？

すると男は一瞬、その目を輝やかし、まっ蒼になった顔に赤いうねりを起しながら、確信のある口調で大急ぎで答えた。

わたしは新聞記者ですよ！　警察に頼まれたなんて、とんでもない誤解だ。

どこの新聞だ？　彼はつづけていった。

××新聞だよ。

しかしあんたは、おれたちのことをどこで聞いたんだ、警察だろう。そのはずだぜ、おれたちがこのあたりにいることを知っているのは、警察だけのはずだからな。……何

も頼まれてないということはないと思うがね。
誤解だよ、きみは誤解しているんだ。そりゃあ、きみたちのことを聞かしてくれたのは下の警察だが、わたしが来たのは、きみたちのほんとうの気持が知りたかったからであって、それ以外の目的はないよ。だいいち、それ以外の目的があったら、一人でのこのこと来られるはずがないだろう。新聞はあくまで警察とはちがうんだ。
どうかね。同じようなもんだろ。新聞は警察と同じように秩序の番人になっているからな。その秩序がどんなに非情なものであっても、結局はその枠から出ようとしない。そうだろう、それがいまの新聞の絶対的な存在条件になってるんだ。
いや、それはちがう、新聞の存在条件は民衆だ。
あんたは、それを、おれたちがいままでどんな風に取扱われてきたのか、知ってて言ってるのか！　と彼は荒げた声でいう。
男は膝を小刻みに慄わせはじめた。両手を握りあわせたが、それでも慄えの方が男の細い体をとらえて離さない。恐怖が粒になり、蒼ざめた顔にふきだして、いまにもかちかちと音をたてそうである。
信じてもらいたい。わたしは君たちの意見と生活を取材する以外の目的はまったくもたんのだ。わたしは記者だよ。
それじゃあ、どうして慄えてるんだ！　とそのとき村上が口をはさんだ。
そうだ、何か隠していることがあるから慄えるんだろう、ともう一人の隊員が男の後からいった。
男はびくっと頬を痙攣させ、後を振り向き、両手を腹の前で握り合せた。
駄目だよ、そんなことをしたって、おまえは隠しているんだ、だから慄えるんだ。みろよ、慄えがとまらないじゃないか、観念して、正直にいうんだな。ここは山の中だぜ、と生田がいった。
男はびくっと体全体を強くふるわせた。何かいおうとするが、それがはっきりした声にならず、形のいい唇が動くだけで、止めようとする慄えはさらに強まってくる。つと、隊員の福田が、前にでてきて、土工の手、手というより生きた木の根っこのような手で腿をこすりながら、乾いた表情を男の顔にすりよせるようにしていいだした。
おれが片づけてくるよ。向こうに連れてって締めてやる。それでいいんだ。この山の中だ、深く掘って埋めてしまえば、永久に行方不明ということで、チョンだよ。奴らだってやってることだ。こんな奴を、このまま放したら、こっちが危いからな。
瞬間、境はぎょっとして福田の浅黒い顔を見つめた。福

田は本気なのか。本気で殺るというのか。……彼は鈍く光る鉛色の目を見つめて、とつぜん、暗い恐怖の眩暈に襲われた。福田のその鈍い鉛色の目には見憶えがあった。

あのレッド・パージに反対するピケに参加しているときのことである。血みどろの激突があり、彼は警棒で頭を割られて倒れた。そして、ふと気づくと、上の方にものいわぬ警官たちの目が集まっていたのだ。そのときの警官たちの目が鉛色に光る目だった。重く光る鉛色が彼の頭の中に急速にひろがる。とり囲まれ、殺されそうなのは彼の方ではないのか。

警官たちはやにわに彼を暴力のトンネルに引きずりこみ、蹴りあげ、彼の全身はたちまち足蹴のブルドーザにかけられた泥人形のように力を失ったが、警官たちはそれでもなお、その殴る手、蹴る足をとめようとしなかった。彼らは殺意にかられているのだ。それが直感されたとき、それまで彼の体の中をどす黒い色に染めていた恐怖は、蒼白い矢になった。その細い矢がいま無数にとびかう。頭の中がまっ蒼になった。それは首の方へ下っていき、胸にひろがり、背中の方にまわり、さらに下りつづけ、足先きまでまっ蒼にしてゆく。殺されるのは彼の方ではないのか。全身が恐怖の中に氷づけにされる。

殺すな！　彼は思わずさけんだ。殺されるのは恐しい。死は人間を無限に深い静寂の表面に水平につき放すのだ。福田はその深い淵をただよう水平浮游の恐怖を知っているのだろうか。いや知らない、もし知っていたら、だれのうえであれ、ふたたびあの恐怖の浮游を見ようとは思わないだろう。この瞬間、彼は自分がこの闘いで見失っていたもの、混沌とした闇の底で自分が真に求めていたものを直感した。殺すな！　殺してはいかん！　と彼は叫ぶ。おれはそんなことは許さんぞ！　おれたちが闘いに参加しているのは人殺しをするためじゃない。生きるためだ。生きて、生きつづけるためだ。おまえは自分を殺したいのか！　彼は激しく声を慄わせていった。

緊張した沈黙があった。福田はむっと怒ったような顔をしていた。が、しばらくして、境は、ほっと息をついた。福田がいつまでも怒ったような顔をしているのは、すでにその内心で恥じている証拠なのだ。もともと、彼もまた本気だったのでなく、自分たちの意志に反して逼迫してゆく険悪な空気から解放されたがっていたというのがほんとうだったのかもしれない。彼はもう一度ほっと息をついた。と、そのときである。奇妙なことがふたたび起った。ふたたびあの屍体のそばに寝かされていたときの暗い灰いろの意識が彼の頭に甦ったのだ。ほっとした感じ、彼の胸を締めつけていたものがとれた感じはたしかなのだが、それは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

捕えられた記者をめぐって起きた険悪な空気が解消したからであると同時に、自分の体が、あの土手の地面に寝かされていた状態から、宙に持ちあげられているのを感じるからでもあった。あたりが急に暗くなった。そして何かが自分の体から逃れようとしているのが感じられた。彼は自分から逃れさろうとするものをとらまえようとして、緊張し、体をよじろうとしたが、それは宙に持ちあげられている自分を確認しなおすことになり、とらまえようとするものを突き放すことにしかならなかった。たしかに彼の体は、足と頭をもたれて宙に浮かんでいるのである。彼は夢を見ているのか。

やがて、ふと気づくと、彼はいつの間にか、あの屍体を積んでいた車に寝かされていた。そして車輪に鉄の輪をはめた大八車は、小石の多い道をかなりの速さですすんでいるのであった。小石の弾ける音、砕ける音がしており、がらんとした空を、危急を告げるサイレンの音にも似たひびきがひっ掻いていた。彼はしばらくぼんやりと目をひらき、その激しく揺れる空を見あげていたが、間もなくまた目をつむった。さっき、彼を助けだしてくれた男たちのことがあらためて意識に浮んだ。男たちは、彼を救護所に連れてゆくといっていた。やがて彼はその救護所に連れられてゆき、医師の手当を受けることになるだろう。だが、目をつむり、暗い大八車の震動に全身をゆだねて、どれくらいしてだろうか、とつぜん彼は恐ろしいことに気づいた。大八車がひとりでに動いているように感じられるのだ。大人たちの気配がない。それともそれは彼の錯覚なのであろうか。胸を圧しつけてくる不安を押しあげるように、彼は、おじさん、といい、もう一度、おじさんといい、最後に声をふりしぼった。おじさん！

案の定、返事がなかった、もしかしたら、彼はあの地面に寝かされているうちに死んだのであり、彼の声はもう永遠に男たちにとどかないのではなかろうか？……そういえば彼の耳に聞えるのは、大八車の固い震動音だけであった。どうして大八車の音しか聞えないのだ。彼は動かない首を動かそうとし、はね起きようとして、起こそうとする体がまったく動かないことを知って、ほんものの恐怖にとりつかれた。まるで全身が透明な氷の中に凍結されているようだ。冷たい。彼は叫びはじめた。おい！　だれなんだ！　車を引いているのはだれなんだ！　おれは生きてんだぞ！　おい、生きてんだぞ！　どこに連れてゆくんだ！　どこだよ！　降せ、降してくれよう！……だが、彼の声はだれの耳にも、もうとどくことがないのかもしれなかった。固い石ころを弾きとばしてゆく大八車は止まろうとしない、それどころか、むしろ速力をましてゆく感じであった。

そのうちがらんとした空が深みをましてきた。そしてそのとき彼ははじめて、あたりの焼け焦げた風景に気づいた。見わたす限り何もないのだ。火炎に炙られ、仁王、あの仁王の怒髪のようにつったった枝々のすべてを、風下に向けて捻じ曲げられた黒焦げの大木が見えるだけだ。それは、虚ろな黒い荒野につっ立った、たった一本の墓標のように感じられた。彼が知っていた町、あの市、寂びた匂いのする瓦屋根とつつましい裏通りの喧噪、ビルや電車、大田川、神田川、猿猴川、京橋川、元安、天満、福島、山手の諸川が澄明な流れを流していた水の都、狭い曲りくねった道の多かったあの城下町の全体が黒く抉りとられたように消えてしまっている。いや、そもそもこの焼け爛れた荒野があの広島なのか！　彼はたいらに横たわったまま、かろうじて目だけを傾けていた。……焼け焦げた瓦礫の地がどこまでもつづいている。あのぎっしり建ち並んでいた建物や電車や動物はどこへ消えてしまったのであろうか。人間はもうどこにもいないのか。彼の歪んだ視線は黒い瓦礫のうえをはいすすんで、まっすぐにはるかな地平の蒼ざめた隆起、がらんとした空の下の沈黙する山々の麓までとどいた。すべてが蒸発してしまっている。彼は再び、父親たちの所に駈けもどろうとしたときのことを思い出した。あのとき、彼の行手を阻んだ炎、彼を水際に追いつめたあの炎が、遠いあの山麓まで走ったのだ。もしかすると、あの炎は蒼ざめた山々を越え、いまもどこかを走りつづけているのではなかろうか。この地上のありとあらゆるものが、すでに焼き尽くされているのではなかろうか。それとも彼はやはり死んでいるのであり、彼の目の前にひろがっているのは地上のものでなく、死の国の風景なのだろうか。大八車は休むことなくすすんだ。小石の砕ける音がつづく。暗い耳底で輻がまわり、大八車の残酷な車輪の音だけが聞える。それだけしか聞えない。彼はがらんとした空に向かってまっすぐ立ちのぼる白っぽい煙を、一瞬じいっと見つめて目をつむった。おれは生きているのか？　彼は思う。生きているのか？。喚声がふいに彼の口から吹き出した。意味もなく、ひびきもない叫び声は闇の中に赤黒い火柱となった。それはいっきにその幅をひろげて、うねり出す。またしても黒い、青い、赤い炎が眼底から奔流してくる。炎の大洪水がおしよせてくるのだ。全身の脂肪が沸きたちはじめた。体が燃える。顔が燃えはじめた。手が燃えている。と、そのときである、津山泉子の顔が炎の中にひらめき、それはまっ白であり、のっぺらぼうであったにもかかわらず、彼にはなぜか泉子だということがわかり、それがわかると同時に彼の肉体は、その意識が機能を回復し、何事かを順序よく告げてくるまえに、すべてを、いっきにさとっ

た。

燃えているのは胃袋の中なのだ。そうだった、彼は津山泉子と一緒に死のうとしたのだ。彼の肉体はいま、それを思い出す。二人は掟を破って再会したのだ。そしてそのとき、彼らはどちらもそれに触れようとはしなかったが、自分たちの再会が死に向かって傾斜しているのを知っており、自分たちが、その未知なるもの、恐れるものへと急速に向かっているのが感じられるからこそ、二人はそれに触れようとしなかったのであり、抱きあい、生きたいということすら口にすることを恐れ、ただ抱きあい、残忍さを発揮して重なりあい、互いに相手の肉体の中に溶けこもうとし、のり越えようとしたのだ。そして泉子は彼を男を恐怖を、彼は泉子を女を恐怖をのり越えようとして、のり越えることができず、それがはじめから不可能だったことを納得し、見つめあい、どちらもそれを口に出していったわけではないが、二人が同じことを考えていることがわかったのであり、そのときはまだ泉子の腹の中、あの偏平なナスビ型の中で健在だった二人の子供にすまないと思いながら、それとても話合ったわけではなく、まるで何十年にもわたって愛しあい、憎しみあってきた夫婦のようにあらためて相談することもなく薬を用意し、自分たちがもう燃えつきてい、燃殻であり、二度と燃えあがることがないことを確認し、それもまた無言のうちに確認しあい、用意した睡眠薬を二人で分けあって呑み、その空になった薬のケースをきちんと片づけて仰向けになったのだ。そのときのことを、いま、彼の暗い肉体は思い出す。おそらくそれ以来、彼はずうっとこのタールのように光る黒い空気の中の熱い冷たい道を、一人で歩きつづけていたのだ。あのおびただしい屍体や、焦げた瓦礫の地や山中の出来事も、彼が現実に歩んできた道が痛苦にみちた迷路であったように、錯綜したこの光る闇の中のことだったのであり、それが、いま終りかけているのだ。彼はそれを感じる。厚い闇にはいまなお動きの気配がないにもかかわらず、あのざり蟹のようにかたい現実が、暗い霧の厚みをとおして感じられるみたいに感じられる。いま彼が浮かびあがるというより、現実の方が彼へ近づいてくるのだ。……

闇の中のその感覚は、間もなくとつぜんのようにして現実となった。彼の全身を冷たくとらえていた黒い空気が、音もなく消えてゆく。と同時に、彼はぱかっと目をひらいた。白いものが目の中に流れこみ、頭にしみる。白っぽいものが見える。仄白い光を漂わせているのは天井であった。彼はそれを認める。頭の中の白い波がひろがる。今度こそ、彼の混濁していた意識は一種不思議な思いとともに光をとりもどした。どこだろう？　一瞬彼はぼんやりと思う。が、

次の瞬間、ぞっとして天井を見つめなおした。泉子とのことがあらためて甦ったのだ。彼の目に見える天井は、泉子の部屋のあの煤けた板張りの天井ではない。泉子は？　すべては悪夢の中の出来事だったのか？　二人は一緒に薬を呑んだのでなかったのか？　彼は不安と恐怖と新しい混乱に襲われながら、大急ぎで首を右に捻る。すると、思いもかけない方角、頭の上の方から男の声が、のぶとく響き、事務的な調子でいった。

「やれ、やれ、やっと気づいたようだな。どうだ、え、気分は？」そして見憶えのない男の、幅の広い鈍そうな顔が、声のした方を見ようとする彼の目の上にせりだしてきた。

「どうだい、え、気分は？」と男はふたたびいい、ちょっと覗きこむようにしてつけくわえた。「わしの声がわかるか。うん？　どうだい」

「泉子は？……」と彼は咽喉元にひしめきあがる恐怖を、声にして押しだした。

「どうやら、わかるようだな」と男はいう。

「泉子はどうしたんです！」と彼は涸れた声でくり返した。

男はちょっと口を噤んだあと、吐き出すようにいった。

「どうなった？　死んじゃったよ。聞えるか、死んだんだ。まったく馬鹿なことをしたもんだ」

「死んだ！」

「そうだ。おまえが殺したようなもんだな。おまえが誘ったんだろう。そうだろう、ちがうか」

「死んだ！……」彼はくり返した。

「まったく、馬鹿な男だ。可哀想に女の亭主は、気狂いのようになって悲しんどったぞ。とにかく、おまえっていう奴は、ひどい奴だ。他人の女房を道連れに殺してしまうんだからな」と男はいう。

彼の暗く光る目が黒い隈の中で、急に大きくなった。それはなお男にまっすぐ向けられたままだったが、すでに男を見ているのでなく、暗い二つの穴のようになり、まるで自分自身の頭の奥をのぞいているかのように虚ろになっていく。男はしかし、それを気にする様子もなくつづけた。

「とにかく、そういうことだ。女は死んだ。助かったのは、おまえだけだ。おまえだけが生き残ってるんだ。つまり、そう、それだけおまえは業が深いんだな。そうだろう。自分でもそう思うだろう。な、境！　境道夫、そうだったな、おまえは境道夫だな？」

一瞬、境のその暗い目に、きらっと光るものが走った。彼は男を見つめる。だが、暗い影がすぐそのあとを追って揺れあがり、その光るものを呑みこんだ。彼はもう、男を見ない。無言のままかすかに首をうなずかせた。

「よし、よし、それでいいんだ。名前は、境道夫。年齢は

二十三歳。そうだな。住所は不定と……」と男はいう。
今度もまた、彼は無言のままかすかに首をうなずかせ、白っぽい綿ぼこりのついた瞼をおろした。
「よろしい。今日のところは、この辺でやめておこう。あとのことは、いずれおまえの体が回復してからだ。聞えているんだろう。とにかく、おまえは生き残ってしまったんだ。それがおまえにとっちゃあ運のいいことだったのか、それともその反対だったのかはわからんがね」と男はいう。
境はふいにわれに返った。みると、男はいつの間にかベッドの横に立っていた。
「あんたは、だれなんです?」境は暗くかすれた口調でいった。
「わしか。いままでそれがわからなかったのか。しかし、もうわかってんだろう。そうだ、M署の者だ。ついでにいっておくがね、ここの病院は厳重に監視されているからな。逃げようなんてことは考えん方が身のためだぞ。今度のことがなくても、おまえには逮捕状がでていたんだから、こちらとしては逃がすわけにはいかんのだ。まあ、観念して、ここのところは体の養生につとめることだな」
間もなく男は、頑丈な肩をゆすりあげてでていった。扉が閉まった。境はゆっくりと顔を仰向かせると、灰いろに見える天井に暗い目を据えた。その目から、いま黒い影がたちのぼる。おれはついに一人になってしまったのだ。それがいまさらのように無限の重みをもって感じられてくる。おれは、もう、永久に一人になったのだ。恐怖は起きなかった。しかし怨みが、自分自身に対する怨みが、怨みと痛苦が、そして暗い寂しさが、彼の蒼ざめた体を刻みこんでゆく。刻みこんでゆき、彼の全身を慄わせる。
泉子!……
彼は天井を見つめつづける。すると、あの大八車の震動が、ふたたび彼をのせてゆっくり動きはじめた。彼は運ばれてゆく。いつしか彼は、灰いろのひろがる天井を見あげたまま、その暗く深い目から涙を流していた。……

2

「やあ、きた、きた」地区委員の木崎が甲高い声をあげた。
「われらが、斉木先生のお出ましだぞ」
斉木は背を屈めるようにして土間に立つと、上瞼をおしあげた。狭い小屋の中では、煤けた顔の男たちが、臓物鍋をとり囲んで車座になっていた。その男たちの顔が湿気をおびた黄いろい光の間に浮んでいっせいに揺れあがる。
「遅くなって……」斉木は目を伏せて、呟くようにいった。

「さあ、さ、上った。ずいーと、奥へさ」と細胞キャップの北川がいう。

「ずいーとな。そしたら、向うに出っちまうぜ。ずっ、てところでとまるんだ」とだれかがまぜっかえした。

「坐れよ。一杯いこう」と木崎がいう。

斉木は低い上り框に腰を下して、つき出された湯呑の茶碗をつかんだ。安酒の匂いが鼻孔をつきあげた。目をあげると、白い湯気のたちのぼる向うの正面に北川の顔が見えた。その右手にいるのが顎の長い関口である。斉木は手に茶碗をもったまま、車座の男たちを見ていった。運転手の橋本と旋盤工の竹田は北川の左側に並んでいる。中山もいた。中山は鍋の方に体をのりだすようにして、早くも食べるのに夢中である。牛の腸や肝臓の切れっぱしが、ぱくっぱくっとひらく口の中に消えてゆく。生真面目な顔をした島原もきていた。島原は今日非合法出版物の配布があるはずだが、その仕事はもう終ったのであろうか。多分、終ったのだろう、無事に。堀川町細胞の中心的な活動家がほとんど集まっていた。木崎がいいだして、内輪に忘年会がおこなわれているのだ。斉木はしかし、そのとき島原の隣り、隣りというより、その黒っぽい背広の肩の陰にこの町ではかつて見かけたことのない男がいるのを、ちらっと目にした。どこかで会った気がするが、思いだせない顔である。だれだろう？　一瞬彼はその男を見つめなおそうとして視線を変えた。

「どうしたい、ぐっとやらんかい、ぐっと」と木崎がいった。「おれにこうして、いつまでこの重い一升瓶をささげもたせておくつもりだ」

「いやあ……」斉木は瞬きしながらいった。

「いやあじゃないよ。いっきにやるんだ、命令だ」と木崎は楽しそうに目を細めた。

「ゆっくりやるから、いいじゃあないか」と斉木は真面目な顔にもどって答えた。

「呑まないつもりか。今日は忘年会だぞ。それとも、党員は酒を呑むべからずって規約でもあったかな」

斉木は揺れあがる暗いものを隠すように目を伏せた。酔うのが怖い。酔いだせばきっと何かいいだすだろう。さっきまで一緒だった水野の端整な顔が、伏せた目の奥から浮びあがった。〈党に新しい動きが起っているのを、おまえ知っとるか〉水野はそういったのである、党が変るというのだ。〈いずれはっきりするだろう〉ともいった。斉木はびくっと上瞼をあげると、木崎の人のいい視線を逃れるように湯呑みへ顔を近づけた。唇に湯呑みの縁がふれる。彼は急に、まるで挑みかかるような勢いで、湯呑みの酒をいっきに空けた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com